

Salon

Vol.101 2016年3月 春号



ホール2Fホワイエ壁画 ポール・ゴアマン作「野外のヴァイオリニスト」

CONTENTS	01 Prime Interview — イサン・エンダース
	03 Phoenix Presents — 福田進一&ジェレミー・ジューヴ ジョイントリサイタル
	05 Pick Up
	07 Memories of 20 seasons — メモリアルインタビュー 福田進一
	11 Essay de say — とらわれの幸せ 日紫喜 恵美

ドイツの名門楽団「シュターツカペレ・ドレスデン」首席を務め バッハ「無伴奏組曲」全6曲で日本デビューする俊英チェリスト

イサン・エンダース



©Taeuk Kang

2016年7月、ザ・フェニックスホールの舞台に大型新人チェリストが登場、バロックの大家J・S・バッハの名作「無伴奏チェロ組曲」全6曲を一日で一気に弾ききる。ホール音楽アドバイザーを務める世界的ヴィオラ奏者、今井信子の推挙によるリサイタル。弾き手はイサン・エンダース。ドイツのシュターツカペレ・ドレスデン(ドレスデン歌劇場管弦楽団)の首席奏者に弱冠20歳で就任した逸材。同楽団はザクセン公国の宮廷楽団として創設されて以来、460年余の歴史と伝統を誇る。ヴェーバーやヴァーグナー、R・シュトラウス、ベームやシノーポリ、ハイティンクといった錚々たる大御所が指揮を執ってきた、正にドイツを代表する名門。ドイツ音楽の真髄を吸収し、入団4年後にソリストとして独立。ウィーン、ベルリン、プラハといった欧州の舞台上で喝采と称賛を浴びている。今回の舞台は、文字通りの日本デビュー。彗星のような輝き・煌(きらめ)きを帯びた、俊英の肉声。
(インタビューと構成:あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール 谷本裕)

シュターツカペレ・ドレスデンで4年間、首席チェロ奏者を務めました。

—ドレスデンでの日々は刺激的で、最も素晴らしい学びの時でした。音楽は大きい。たった一人のチェリストに出来ることは限られています。ヴァーグナーやマーラー、ベートーヴェンといった作曲家の壮大な作品にメンバーともども取り組み、独りで練習して身につけたことより遙かに多くを学べました。在籍中の学びを大切にしています。

実り多き「首席」経験

印象深かった指揮者を挙げてください。

—大きな刺激を受けたのは、ロリン・マゼールやジョルジュ・プレートルとのプロジェクト。またクリスティアン・ティーレマン(現・首席指揮者)の時代は、ワクワクするものです。彼の音楽作りは独特で、オーケストラはまるで生まれ変わったかのように意欲的になりました。ファビオ・ルイーギが代役

でプッチーニの『トスカ』を振り、ドラマティックな演奏をしたことも、決して忘れません。

同時代の音楽に積極的に取り組んでいますね。21世紀のチェロ奏者として、どうありたいですか？

—私は自分自身を「建設者」のように感じています。音楽演奏に際し、自分なりに概念を作り、それを喜びや感動、知性で満たしていくのが好きなのです。特に大切にしている概念は「対照(コントラスト)」。私は、様々な作品を人々に伝えられる「媒体」になりたいと願っていて、ベートーヴェンやシューベルトといった古典を演奏するのと同じくらい、現代の作品も手掛けています。それだけの価値がありますし、自分自身が、あるいは音楽そのものが、進展し続けることはとても重要なこと。演奏活動の中で、古い作品と新しい作品を組み合わせることで、自分が大切にしている「対照」の大切さを示したい。クラシック音楽のマーケッ

「コントラスト」目指して

トは新しい音楽に対して、必ずしも協力的ではありませんけれどもね。

カザルスの本契機に

今回、取り上げるのはバッハの「無伴奏チェロ組曲」全6曲。この曲はどういう経緯で知りましたか。

— 大半のチェリスト同様、パブロ・カザルスの著作『光と影』で知りました。この本にすっかり魅了され、チェロとバッハを、より深く学びたいと思いました。そのしばらく後、アンナー・ビルスマのCDを手に入れ、何百回も聴きました。様々な声部が、たった一つの楽器から聴こえてきます。チェロはこんなにも美しく色彩豊かに響くのか。信じられない思いをしました。

お好きな録音は他にもありますか？

— 特別な「お気に入り」はありません。ほとんど全ての録音が好きです。どの録音も、それぞれの演奏家の見解や結論があります。皆、努力を重ね、時間と労力を費やし仕上げたのです。ですから私はまず、一人のリスナーとして彼らの録音を楽しみます。アンナー・ビルスマやハインリッヒ・シフには、大きな影響を受けました。彼らには「独自の音」があります。また、ミッシェル・マイスキーのような、激しい感情の込められた録音も素晴らしいと思います。一番重要なのは、私が自分自身を知り、「自分の音」を見出すこと。これに尽きます。

生演奏もたくさん聴かれたことでしょうか。

— ナマでこの曲を聴いた経験は、正直なところ、ほとんどありません。聴きたくなかったからではなく、演奏される機会に恵まれなかったのです。一番最近の、そして印象に残ったほとんど唯一の例は、ヨーヨー・マです。演奏に魅了され、言葉を失ってしまいました。この組曲に含まれる特にくつか作品は、極度の集中力を持って取り組むのが、とても難しい。でも彼は、それを成し遂げています。リサイタル全体が、まるで、バッハのひとつの作品のように感じられました。

「弾かねばならない」

そうした先達が演奏してきた中で、あなたはなぜ、この作品に挑もうと考えたのでしょうか。

— どうしても弾かねばならない、と感じたからです。この挑戦は必須。音楽的な成長を期す上で、重要なステップでした。「聖典」とも言われるこの作品に向き合い、自分なりに斬新な見方、解釈を示す。それは、とても大きな充実感をもたらしてくれます。バッハを演奏するのは本当に難

しい。でも私は彼の音楽と共に育ち、親しんできました。この種の挑戦は恐らく、生涯続くと思っています。

確かにあなたの演奏は、古楽の作法と、ロマン主義的な演奏が微妙なバランスで同居しています。作品に取り組む際は、どんな風に演奏をつくりあげたのですか。

— おっしゃる通り古楽奏者から学んだテクニックを使っていますが、用いたのは現代の楽器。そして現代の聴衆に向けて演奏しています。現代の演奏家は「古楽」の知識を備えつつ、現代のスタイルで演奏しなければなりません。私と、300年前

Isang Enders

1988年生まれ。20歳でシュターツカペレ・ドレスデンの首席に就任、ドイツ最年少の首席奏者となる。4年間に在籍の後、ソロ活動に集中するため退団。以後、世界各地でデビューを重ね、成功を収める。12年にはズービン・メータ指揮でドヴォルザーク音楽祭にブラームスの二重協奏曲でウィーン楽友協会に、14年にはエリアフ・インバル指揮でソウル・フィルにデビュー。15年にはフランス放送フィルとの共演で「パリの秋」音楽祭に出演。これまでにクリストフ・エッセンバッハ、チョン・ミュンフらの指揮でシュターツカペレ・ドレスデン、ベルリン放送響、シュトゥットガルト・フィルハーモニー管などと共演。今後、フィルハーモニア管との初共演、ソウル・フィルとのデュティユー「チェロ協奏曲」韓国初演、スロヴェニア放送響とのシューマン「チェロ協奏曲」などが予定されている。使用楽器は1840年製のジャン＝パティスト・ヴィヨーム。ベルリン・クラシックス、SONYミュージック・エンタテインメント・コリアからCDをリリースしている。

の人人々とは、音楽の聴き方がそもそも違います。現代人は、昔と違う話し方、歌い方、踊り方をしていでしょうか？音楽の捉え方も絶え間なく変化しています。私は、この組曲が帯びている、まるで何かを語り掛けるような性格と、歌心に溢れた性格、その両方を聴いて頂きたいと考えました。

チェロは基本的には、一つの旋律だけを奏でる楽器とされています。でもこの作品は複数の声部が書き込まれていて、まるで多声音楽のように響いてきます。演奏するにあたって、こうした特徴を持つ他の作品、たとえばヴァイオリンやフルートのためにバッハが書いた無伴奏作品も、参考にされたのでしょうか。

— ある作曲家について勉強する時はもちろん常に、より深く知る努力をします。バッハにはバッハにしかない、特殊な音楽上の「語法」があります。彼のコーラルや受難曲、協奏曲やオルガン作品、更に合唱曲などを学ぶ事で、大きな力を得ることができるでしょう。ただ、たとえ彼の全作品を知

り、また全てを学び尽くすことが出来たととしても、かつての彼と同じ語法を体現するのはおそらく不可能ではないか、と私は思うのです。

それぞれの組曲は、当時の欧州で親しまれた舞曲で構成されています。

— 舞曲を編んで組曲に仕立てる。その手法は今日までしばしば使われています。バッハの全6曲は、楽章の数や舞曲の出で来る順番が共通しています。彼は実際に踊ることを想定して舞曲を作った訳ではないでしょう。組曲を構成する個々の作品を特徴付け、劇的な枠組みを与える。そうした様式化のため、舞曲を活用したのでした。

完成目指す過程こそ

6つの組曲を、何かに例えてみると。

— 第1番「静かな作品。緑色。小石が風に舞っている」。第2番「事間いたげな作品。かすんだ黄色のよう。様々な音に満ちている」。第3番「荘厳な作品。トランペットが鳴り響く」。第4番「陽気。紫色」。第5番「闇。灰色、煙草の匂い」。第6番「壮大。青」、でしょうか。自分自身、この組曲全てを録音してみて、コントラスト豊かにこの大作を仕上げるのがいかに難しいか分かっています。

その録音であなたは、いったん全てを録り終えた後、なんと最初からまたやり直したと聞きました。

— 録り直しを受け入れられたことを、本当に感謝しています。画家が自作を何度も手直しし、描き直し、上から塗り直すのを見たことがあるでしょうか？ミケランジェロのような巨匠に自分を重ね合わせる気は毛頭ないのですが、こうした営みは私たち芸術家には大切な作業の一つです。つまり、「磨き上げていく」のです。私たちは常に、完成を目指すプロセスに居ます。そしてその過程で思い掛けない事が起きたりもします。「出来あがり」が良いものである、とは必ずしも言えません。大阪の公演でも、そんな「現在進行形」の演奏を、楽しんで頂けたら嬉しいですね。

協力:AMATI

「今井信子presents」慧星、イサン・エンダースーバッハ『無伴奏チェロ組曲』公演は2016年7月16日(土)午後3時開演。J・S・バッハ:無伴奏チェロ組曲第1番 ト長調 BWV1007、第2番 二短調 BWV1008、第3番 八長調 BWV1009、第4番 変ホ長調 BWV1010、第5番 八短調 BWV1011、第6番 二長調 BWV1012を演奏する。入場料2,500円、友の会2,250円。学生1,000円(限定数)。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみのお取り扱い。チケットのお求め、お問い合わせは同センター(電話06-6363-7999 土・日・祝を除く平日10時~17時)。



3月4日(金)

10:00 受付開始

ザ・フェニックスホール
友の会優先予約

3月7日(月)

10:00 受付開始

イー・フェニックス
E-PHX優先予約

3月8日(火)

10:00

一般発売

インターネット予約、ご来店による
お申込みは3月9日(水)10:00から!

■Kansai Soloists & Ensembles 20

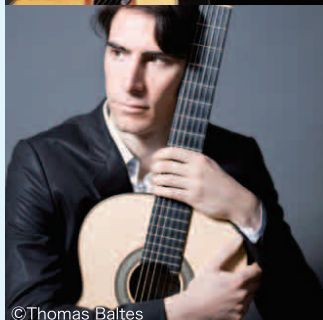
2016年8月27日(土)

19:00開演 指定席

一般¥4,000(友の会価格¥3,600)

学生¥1,000(限定数)

出演 福田進一、ジェレミー・ジューヴ
(以上ギター)



©Thomas Baltes

際立つ技巧、ポピュラーや現代作品も手掛けるパリの新鋭を迎え贈る、真夏の祭典。

Osaka Guitar Summer 2016 <福田進一と仲間たち vol.7>

福田進一&ジェレミー・ジューヴ ジョイントリサイタル

曲目 M・デュプレッシー:新作(ジェレミー・ジューヴ日本デビューのための) 武満徹:森の中で
F・タレガ:ヴェルディ「椿姫」による幻想曲(W・レッキー医師のための改訂版) J・ロドリゴ:トナディーリャほか(予定)

マエストロ福田のプロデュースする真夏のギター祭典。ゲストは、フランスのジェレミー・ジューヴ。パリ・エコール・ノルマル音楽院の後輩で、共に名教師アルベルト・ボンセに学んだ。米国GFAコンクールを制覇、クラシックはもちろんポピュラー、民族音楽の分野でも活躍するマルチプレーヤー。今年が没後20年の武満作品や、タレガの難曲でそれぞれ舞台をシェア。ロドリゴの名作では、「同門」ならではの緊密なデュオを披露する。

福田進一(ふくだ・しんいち/ギター) 大阪生まれ。パリ・エコール・ノルマル音楽院を首席で卒業。1981年パリ国際ギターコンクール優勝。デュオ指揮N響をはじめ内外の主要オーケストラと数多く共演。今世紀に入り、既に世界20カ国以上に招かれリサイタルを開催し世界的な評価を獲得、2008年には福田進一に献呈されたブローウェルの協奏曲「コンチェルト・ダ・レクイエム」をライン州立響と世界初演、引き続き作曲家自身の指揮によりコルドバ管弦楽団(スペイン)、サンパウロ交響楽団(ブラジル)により再演され大成功を取めた。日本の優れた音楽文化を世界に紹介した功績により、平成19年度外務大臣表彰を受ける。教育活動にも力を注ぎ、門下からは鈴木大介、村治佳織、大萩康司といったギター界の実力派スターたちを輩出している。発表したCDは既に70枚を超え「セビリア風幻想曲」は平成15年度第58回文化庁芸術祭賞優秀賞を受賞。代表作は「福田進一 アランフェス協奏曲」(共演:飯森範親指揮ヴェルテンベルク・フィルハーモニー管弦楽団)、「オダリスクの踊り」「エチュード・プリランテ」「タレガの作品集」「J・S・バッハ作品集1、2、3」、「プエノスアイレスの冬〜tribute to A. Piazzolla」。2013年にはナクソスレコードより「武満徹作品集」がワールドワイドでリリースされた。平成23年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。上海音楽院(中国)、大阪音楽大学客員教授。東京国際及びアレクサンドリア国際ギターコンクール審査員。

ジェレミー・ジューヴ(Jérémie Jouve/ギター) 1979年フランス生まれ。13歳でグルノーブル音楽院の一等賞を獲得。その後エリック・フランセリーズの教えを受けた。18歳からパリのエコール・ノルマル音楽院でアルベルト・ボンセに師事。パリ国立高等音楽院でローラン・ディアンスの生徒となり、ギターと室内楽を修め、上級課程でも学ぶ。2002年ポーランドのティヒ国際コンクール制覇。翌03年メキシコで開かれたアメリカギター財団国際コンクールで優勝。04-05年に米国、カナダ、メキシコをツアーし40回ものリサイタルを重ねた。モスクワ音楽院のホールやドイツのイーザーローンギターシンポジウム、フランス・モンペリエ音楽祭、ポーランドのサノクギターフェスティバルの舞台などに出演。欧米のほかアジアでも出演が増えている。クラシック音楽の様々な作曲家の手稿譜研究を重ね、作品構造を踏まえた理論的な解釈と圧倒的な技巧に定評がある。ジャズやインド古典音楽、現代音楽にも関心を寄せ、様々なグループのエレキギター奏者としても活躍、優れた室内楽奏者でもある。CDはナクソスから「ギターリサイタル:ジェレミー・ジューヴ」、「ロドリゴ:ギター作品集」(以上、ナクソス)をリリース。最新アルバムは作曲家マティアス・デュプレッシーとの協働による「Cavalcade」。

福田進一&ジェレミー・ジューヴによるギター公開マスタークラス受講生募集



※昨年の様子

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールでは、2010年から日本を代表する国際的ギタリスト・福田進一氏のコンサートを主軸にすえ、さらに福田氏の推薦により若きギタリストを育成する公開マスタークラスを行ってきました。2016年度も公開マスタークラスに参加する受講生を募集します。

■お問い合わせ・募集要項の請求

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
「大阪ギターサマー」事務局

TEL 06-6363-0211 FAX 06-6363-1124

E-mail concert@phoenixhall.jp

URL http://phoenixhall.jp

■講師 福田進一、ジェレミー・ジューヴ(以上、ギター)

■開催日程 2016年8月27日(土)、28日(日)

*公開マスタークラス受講生の方には、修了コンサートにもご出演いただきます。

■会場 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

■募集部門 ソロ部門(4名)

■応募資格 プロの演奏家を志望する、年齢30歳まで(2016年8月31日時点)のギタリスト。専門的教育を受け、また、コンクールに上位入賞するなど外部組織による高い評価を受けている者。

■選考方法 応募資料等により、福田進一氏が選考します。

■参加費 公開マスタークラスの受講料は無料。ただし、参加に伴う交通費や宿泊費、楽譜などは自己負担とします。

■応募締め切り 2016年6月30日(木)

*詳細は、募集要項、当ホールホームページでご確認ください。

■フェニックス・エヴォリューション・シリーズ78

主催 ヴォイスペクティヴ

2016年10月5日(水)

響きのエクリチュール

～グレゴリオ聖歌から近現代まで 教会音楽の千年記～

19:00開演 自由席

一般前売¥3,000
(友の会価格¥2,700)一般当日¥3,500
(友の会価格¥3,150)

出演

声楽アンサンブル
ヴォイスペクティヴ
Voice=Spective眞木喜規(ディレクター、テノール)、
北爪かおり、佐川淳、宍倉朋子、
鈴木芳(以上ソプラノ)、
本郷恵美子、八川浩子(以上アルト)、
岡本雄一(テノール)、
中田浩隆、森敦、林康宏(以上バス)

曲目 グレゴリオ聖歌より

H・v・ピンゲン: おお、真紅の血潮よ

M・ペロティヌス: オルガナム(地上のすべての国々は/かしらたちは集いて)

F・プーランク: サルヴェ・レジーナ(元后 あわれみの母)

G・アッレグリ: ミゼレーレ(憐れみたまえ、主よ) [ヴォイスペクティヴによる校訂版]

A・ペルト: マニフィカト(わたしの魂は主をあがめ)

O・メシアン: おお、聖なる晩餐よ

ほか

今から約千年前、修道士グイド・ダレツォは記譜法とドレミ唱法を編み出しました。人々が声を合わせるだけでなく、重ねる美しさに喜びを見だし始めたのと時を同じくして、口伝えによって歌い継がれてきた音楽は楽譜に記録されるようになり、数多くの作品が後世に残されました。千年にわたって書かれてきた「声」の芸術を、「現代の空間に並べてみたらどんな響きがするのだろうか?」という素朴な発想は、私たちにダイナミックな視点を与えてくれました。いにしへの響きは時を越え、近現代の音楽と響きの美しさという点で呼応しい、普遍的な響きが現代にも脈々と受け継がれていることを教えてくれます。今回ご紹介できるのはその一端に過ぎませんが、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールの豊かな響きと共に、声の芸術を存分にお楽しみいただけることでしょう。

ヴォイスペクティヴ (Voice=Spective)

パリ在住の鍵盤奏者・畑野佳恵と声楽家・眞木喜規の呼び掛けにより、関西を中心に活動する声楽家によって構成される。中世から近現代に至るあらゆる声楽曲において、設計図としての楽譜から立体的な音像と音楽を構築することを目指している。グループ名は、Voice「声」とSpective「視点」をあわせた造語。

2011年結成より、毎夏の定期演奏会を西宮や神戸で開催。明確なコンセプトに基づいたプログラムは好評を博している。古楽アンサンブル「プリンチピ・ヴェネツィアーニ」との共演や、声楽アンサンブル「北摂バロックコア」との二重合唱によるコンサート開催など精力的に活動が続けている。

フェニックス・エヴォリューション・シリーズは、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社の芸術文化支援活動の一つです。同社が運営するあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール(大阪・梅田)での公演企画を公募、審査で選ばれた方にホールと付帯設備を無料で貸与致します。



ホール主催・協賛公演チケットのお申し込み方法

06-6363-7999

土・日・祝日を除く平日の10:00~17:00

■ザ・フェニックスホール友の会優先予約

- ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
- 主催公演1公演につき会員1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
- 友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

■E-PHX(イー・フェニックス)優先予約

- E-PHX(イー・フェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
- 事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話での登録はできません。

■一般発売

- 一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

<http://phoenixhall.jp/>

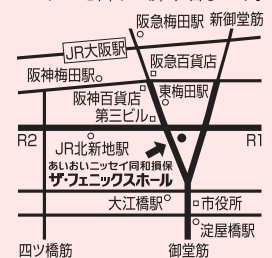
チケットセンターのページからお申込みください

■インターネット予約(主催公演のみ)

- ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
- チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますが電話でお問合せください。
- ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
- 学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
- チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールをお送りいたします。

直接のご来店による
お申込み

- ザ・フェニックスホールチケットセンターはホール建物5階、エレベーターを降りて廊下右手です。



チケットお申込み後のお受け渡し方法 下記①または②のどちらかとなります。

- お申込み日から10日以内にザ・フェニックスホールチケットセンターへご来店ください。営業時間は土・日・祝日を除く平日の10:00~17:00です。
- 先に郵便振込みをしていただき、入金確認後チケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座 00940-0-95351 加入者名 ザ・フェニックスホール

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛公演のご案内

ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

2/24(水)発売

協賛公演 **本田早美花 ヴァイオリンリサイタル**

主催 コンセー・デュ・ジュヌヌ・アンタープレッツ

2016年5月2日(月) 19:00開演 自由席 一般前売¥4,000(友の会価格¥3,600) 一般当日¥4,500(友の会価格¥4,050) 学生¥3,000

出演 本田早美花(ヴァイオリン)
エマニュエル・クリスチャン(ピアノ)
曲目 シューマン:ヴァイオリンソナタ 第2番 二短調 作品121
R・アーン:ヴァイオリンソナタ 八長調
サン＝サーンス:ハバネラ 作品83
サン＝サーンス(イザイ編):フルツ・カプリス 作品52-6

ドイツ初期ロマン派・シューマンの秀作大ソナタと、マルセル・ブルーストが描いた、いしえのバリの音楽サロンを彷彿させるアーン、サン＝サーンス、イザイのフランス音楽。本田は五嶋みどりとのカルテット、モンソロに続き、ザ・フェニックスホール3度目で初リサイタル。正統的、楷書的な演奏の中に芳醇な表現力を持つ現代では稀有の若手と評される。我々に音(生命)と音楽を愛しもっと大事にしたい気持ちにさせてくれるだろう。



©Balazs Borocz

発売中

協賛公演 **ヴィオラスペース2016大阪「ヴィオラの誕生!バロックへの回帰」**

主催 テレビマンユニオン

2016年5月25日(水) 19:00開演 指定席 一般前売・当日¥5,000(友の会価格¥4,500) U25¥2,500(1991年以降生まれの方限定。公演当日、生年を証明できるものをご持参ください。)

出演 今井信子(ヴィオラ、ヴィオラ・ダモーレ)
アントワン・タメスティ(ヴィオラ)
小栗まち絵(ヴァイオリン)
大槻晃士(ヴィオラ・ダ・ス帕ラ) ほか
曲目 テレマン:6つのカノン風ソナタより 第1番、第4番
(予定) J・S・バッハ:フーガの技法より
J・S・バッハ(小早川麻美子編):ブランデンブルク協奏曲 第3番

1992年、世界的ヴィオラ奏者・今井信子の提唱によりヴィオラを基調とする音楽祭「ヴィオラスペース」がスタートしました。「ヴィオラの礼賛」、「優れたヴィオラ作品の紹介と新作発表」、「若手の育成」を3本の柱に、毎年様々なプログラムに挑戦し続けています。25年目を迎える2016年はヴィオラが誕生した時代、バロック特集です。ヴィオラ・ダモーレやヴィオラ・ダ・ス帕ラなど、ヴィオラの先祖ともいえるべき貴重な楽器が登場します。どうぞお楽しみください。



©Marco Borggreve ©Jose Lavezzi

4/4(月)発売

協賛公演 **ミュージック・シェアリング報告コンサート**

主催 認定NPO法人ミュージック・シェアリング

2016年6月8日(水) 19:00開演 指定席 一般前売・当日¥6,000(友の会価格¥5,400)※友の会割引は1会員2枚まで。

出演 五嶋みどり(ヴァイオリン)、
若手演奏家
(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)
曲目(予定)
ハイドン:弦楽四重奏曲 第35番 へ短調
「太陽四重奏曲」集より 作品20-5
モーツァルト:弦楽四重奏曲
ディヴェルティメント K136
久石譲:MIDORI Song

ヴァイオリニスト五嶋みどりが理事長を務める認定NPO法人ミュージック・シェアリングでは、国内外の子どもたちに音楽の喜びを届ける様々なプログラムを実施しています。活動の一つ「インターナショナル・コミュニティー・エンゲージメント・プログラム(ICEP)」では五嶋みどりが若手演奏家とカルテットを組み、アジアそして日本の子どもたちに本物の音楽を届けます。今回は、弦楽四重奏をお楽しみいただきながら、現在全国に参加を広めている「楽器指導支援プログラム」を中心に活動をご紹介します。6月8日のザ・フェニックスホールでは、久石譲氏が当法人与自然と五嶋みどりの夢の実現に想いを込めて作曲された『Midori Song』を初演します。 ※今年も株式会社ダイナック様のご協力により、フェニックスタワー27階の『燦』では、コンサート当日『ミュージック・シェアリング特別コース』を特別価格でお召し上がりいただけます。(要予約)◆ディナープランの詳細については店舗へお問い合わせください。Tel:050-5798-4337



※昨年の様子

夢の公演、募集中。大阪・梅田 フェニックス・エヴォリューション・シリーズ

2017年5・7・10月/2018年1月 ホール無料提供

あなたの公演プランを舞台で実現してみませんか?

当ホールが公演企画を公募し、審査で選ばれた企画者にホールや付帯施設(基本費)を無料で提供します。併せてホールスタッフが公演開催のお手伝いもする公演共催事業です。企画者には公演開催のための様々な仕事に取り組んでいただき、ホールは共催の立場で支援を致します。芸術性やアイデアに恵まれながらも、発表の機会をなかなか得られずにいる国内外のアーティストの方々からの、ユニークな企画をお待ちしています。

●ホール提供日

2017年5月17日(水)、7月8日(土)、10月4日(水)/2018年1月24日(水)

●対象

プロ・アマチュア・ジャンル・年齢 問いません。学生の方や、海外在住の方も歓迎いたします。

●審査基準

◇ 企画内容が明確で、高い音楽性を備えている ◇ 室内楽ホールに適し、かつユニークである
◇ この公演を機会に発展が期待される

●選考アドバイザー

当ホールが委嘱する音楽評論家・新聞記者・研究者の方々(5名)

●特典

公演後、当ホールを利用される場合には、ホール協賛公演としてホール使用料金の特別優遇制度が適用されます。

●応募方法

①応募用紙 ②音資料(CD) ③過去の公演パンフレットなどの資料
④映像資料(DVD/映像・画像を使用する公演のみ)を揃えて、郵送または直接事務局までご提出ください。

●応募締切

2016年6月17日(金)18:00 必着

●審査結果

2016年8月末頃、郵送で通知します。

●資料請求・応募先

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10
あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール「フェニックス・エヴォリューション・シリーズ企画募集」事務局
TEL 06-6363-0211 FAX 06-6363-1124 E-MAIL concert@phoenixhall.jp
HP <http://phoenixhall.jp/> ※詳細はホールホームページをご確認ください。



©Marco Borggreve

音楽アドバイザー プロデュース公演 2016年度「いちおし」を聴く

今井信子氏
(ヴィオラ奏者)



伊東信宏氏
(大阪大学教授=音楽学)

7/16(土) 発売中

今井信子 presents

“彗星” イサン・エンダースーバハ「無伴奏チェロ組曲」

イサンに初めて会ったのは、小澤征爾さんの主宰するスイスのマスタークラスでした。その後、彼もオーケストラの活動で忙しくなり、暫く会う機会がなかったのですが、彼の弾くバハの無伴奏チェロ組曲のCDを飛行機の放送で聴いたり、アメリカのマルボロ音楽祭で再会したり、といくつかの偶然が最近重なりました。しばらく会わないうちに、彼が音楽的にも人間的にも大きく成長していることを知って、とても嬉しく思いました。

彼には韓国人とドイツ人の血が流れているのですが、アジア的なものとヨーロッパ的なものがとても良いバランスで共存しているように思います。知性と感情、そして人間として培ってきた経験がうまく融合しているのです。

バハの演奏では、ピリオド奏法を研究して積極的に取り入れるなど、音楽への探究心も人一倍です。数いるチェリストの中でもソロだけでなく室内楽もきちんと弾ける、これからが本当に楽しみな音楽家です。私は彼の無伴奏チェロ組曲をまだ生演奏で聴くことができずにいるので、大阪のお客様が羨ましいです。是非お楽しみください。

2017年 1/19(木) 7月発売予定

今井信子 presents

今井トリオ(波多野睦美、今井信子、高橋優介)

高橋優介さんは、上野学園大学の私の室内楽クラスの生徒でした。最初のレッスンで一緒にモーツァルトのヴァイオリン・ソナタを演奏したのですが、彼の演奏には驚いてしまいました。言葉にするのは難しいのですが、一緒に演奏していて伝わってくる何か、芸術家だけが持つ感性があるのです。まだ若いですが、まるで巨匠のようでした。高橋さんは直感的にハーモニーを感じる能力があるのだと思います。彼のような若い演奏家を見つけると嬉しくなり、育てたいと思ってしまいます。是非ザ・フェニックスホールのお客様にもご紹介したいと思いました。

波多野睦美さんは真の音楽家です。好きなものであればジャンル、慣習を飛び越えてとことん追求する、そういう方だと思います。一昨年のヴィオラスペースで初共演し、彼女の歌うダウランドの歌曲と私の演奏するブリテンのラクリメを続けて演奏したのですが、鋭い感受性と洞察力をお持ちの方という印象が強く残っています。時代が異なる二つの作品を繋げて演奏する意味を、深いところで理解して歌っていらっしやるのがとても強く伝わってきました。

声楽を入れたコンサートはいつかやってみたいと思っていました。このメンバーでどのようなコンサートになるか、今からワクワクしています。

12/25(日) 5月発売予定

レクチャーコンサート 伊東信宏 企画・構成

声のような音／音のような声 三輪眞弘作品集

三輪眞弘さんは、日本を知らない誰かに、その作品について熱心に話したくなる数少ない作曲家の一人です。奇妙なルールで進行してゆく儀礼のような音楽。日本より東に島国があったら、こんな民俗音楽があったに違いない、という人を喰った設定で書かれた架空の民俗音楽。でも、そこではいつも「ひねり」と真剣さが同居していて、ああ三輪作品だなあ、と思わせられます。

また三輪さんのもうひとつの活動の軸は、佐近田展康氏と展開している「フォルマント兄弟」というユニットです。彼らの活動は、MIDIキーボードを使って、正弦波の音をその場でコントロールして、音声として発音させる、というものです。ここには、ヴォーカロイドが席卷している現代の音楽の世界にあって、音楽家に何ができるか、何を考えるべきか、が示されています。

私(伊東)は、かつて三輪さんが書いた驚くべきオペラ「新しい時代」(2000年初演)をぜひ再演したい、と夢見ています。今回の公演ではそんな夢も視野に入れて、三輪さんの世界を紹介したいと思います。

2017年 2/26(日) 7月発売予定

レクチャーコンサート 伊東信宏 企画・構成

クルターグ・テント『遊び』をめぐって

クルターグ・ジェルジは、1926年にルーマニアの地方都市に、ハンガリー語を母語とするユダヤ系の家族のもとに生まれました。ほとんど誰にも聴かれることも期待していないような、寡黙で、静謐で、それでいて苛烈な音楽は、単なる進歩とか技法の流行などを超えて、多くの人を惹き付け、今では彼は存命中で最も重要な作曲家の一人に数えられています。『遊び』というピアノのための作品集は、そんなクルターグが日記のように書き続けていたものです。

たとえばドレミファソラシの7つの音がそれぞれ1回しか出てこない曲があります。ただし、それらの音は、様々な音域、様々なニュアンス、様々な長さで奏されねばならないので演奏はとても難しく、音楽のエッセンスを指し示してくれます。

今回の演奏会では、ブダペストでクルターグの室内楽のレッスンも受けられた北住淳さんと、パートナーであり優れたピアニストである姫野真紀さんに、このクルターグの『遊び』を中心とする作品を取り上げて演奏していただき、作品へのアプローチについてお話しさせていただきます。

真夏のギターの祭典「Osaka Guitar Summer」を 主宰する世界的ギタリスト 福田進一さん

日本を代表するギタリストとして、クラシックと言う枠を遥かに超越した、しなやかで国際的な演奏活動を展開する福田進一さん。後進の指導にも力を注ぎ、村治佳織さんから世界の檜舞台で活躍する数多くのアーティストを育て上げてきた。地元・大阪出身の福田さんにとって、自身のプロデュースにより、ギターの魅力を多角的に掘り下げると同時に、マスタークラスを通じて若手を指導する「Osaka Guitar Summer」の舞台でもある、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールは“特別な場所”。そして、世界中のホールを知る身にとっても、「ギターにとって、理想的な音響空間」と言い切る。そして、開館から20周年を迎えて、その思い入れは、ますます強いものに。そんなトップ・アーティストから見た、音楽ホールのあるべき姿とは。そんな中で、21年目からのザ・フェニックスホールが向かうべき理想とは。その指先から紡ぎ出される音色と同様、語る言葉のひとつひとつに、ギターを、音楽を、人間を愛する熱い思いが漲る。

(取材・文:寺西 肇/音楽ジャーナリスト)



これまで数多くの世界の檜舞台を経験して来られました。そんな福田さんにとって、このザ・フェニックスホールは、どのような位置づけなのでしょう。

ギターという比較的、音の小さな楽器にとって、300から400席のホールは理想的な空間です。このサイズが楽器の持つ繊細さと迫力の両方を満足させてくれるのです。もちろん、ヨーロッパやアメリカでも様々な良い舞台で弾かせて頂きましたが、ザ・フェニックスホールには、大阪の

中心という立地条件、独自の素晴らしい音響に加えて、もう一つの武器があると思います。それは、聴衆とのコミュニケーションのとりやすさです。舞台と客席の距離が、とても近く感じられる。これは人間の内面を表現する、ギターのような楽器にとって大事ですし、このホールのチャーム・ポイントだと思います。

一方で、大阪と言う独特の雰囲気を持つ街にとって、ザ・フェニックスホールは、どんな存在でしょうか。

私は大阪・船場のど真ん中で育ちました。大阪を離れて、もう40年近くになりますが、南北を流れる堺筋、御堂筋、そして東西それぞれの通りに専門の商いがあり、その活気にあふれた街の雰囲気は、今でもよく覚えています。しかし、近年は帰阪するたび、何かが低迷している空気を感じますね。そんな中であって、ザ・フェニックスホールは理想的な憩いの場、集いの場として、再び大阪文化に刺激を与え、活性化させる大きな可能性を秘めているのではないかと考えています。

音楽通し大阪文化を再興

昨年で6回目を数えた、福田さんプロデュースによる「Osaka Guitar Summer」。ギターと言う楽器の魅力を様々な角度から掘り下げ、その可能性を切り拓いている、と毎回、高い関心を集めています。その企画意図とは。そして、具体的な成果とは。

前のお答えと少し重なりますが、私が子供だった昭和40年代の大阪には、素晴らしいギター文化があったのです。西高東低とでも言いたいか、才能のある若者が大阪に集中していたのです。「Osaka Guitar Summer」は、「音楽ファンのギターへの好奇心や関心を高めることで、昔の元気を取り戻したい」との思いから、プロデュースさせていただきました。あつという間に6回を重ねましたが、演奏会は毎回好評を頂き、受講生たちのほとんどが国内外の音楽大学へ進み、さらに数人は国際コンクールで成果を挙げています。中でも、2010、2013、2014年にマスタークラスに参加した猪居亜美さんは、昨年、デビューリサイタルとレコーディングを果たし、多くの注目を集めました。

そうしたOsaka Guitar Summerの成果を踏まえて、ギター界の現状とは。そして、どこへ向かってゆくのでしょうか。

世界で注目されている最先端の才能を毎夏、大阪に招くこと、そして、ゲスト・プレーヤーと力を合わせて、若者たちを啓発するマスタークラスを開くこと。少なくとも、この2つの試みを、6年にわたって続けてきたわけですが、大阪のギター・ファンは「今日のギター音楽」が、どれほど高いレベルへ到達しているか、認識を新たに下さったことと思います。もはや「技術があるのは当たり前」であって、「その先の音楽」で勝負する時代なのです。日本の音楽史上、やや出遅れていた感のあったクラシック・ギターの世界も、ようやくここへ辿り着いたのです。私としては、ザ・フェニックスホールで芽生えた“好奇心”を絶やさない努力を続けたい。そんなこと

もあって、毎年、ゲストには多彩で個性的なギタリストを招こうと、その選考には特に注意深く取り組んでいます。これまで、アメリカ、日本、ロシア、イギリス、ポーランド、スペインから招きました。例えば、昨年のフランシスコ・ベルニエールは伝統的なスペイン音楽の名手でしたが、今年パリから招くジェレミー・ジュヴは、フランス音楽や新しい音楽の名手です。バラエティー豊かで、ますます充実の時を迎えている「クラシック・ギターの世界」を、ぜひ知っていただきたいですね。

精力的な演奏活動の一方、2015年でご自身の還暦という節目を迎えられました。これまで、古典はもちろん、新作委嘱や様々なコラボレート、ギターによるパッサンなど、様々な取り組みを重ねて来られました。今後の新たなプロジェクトなどは？

80枚以上を重ねてきた、ライフワークのレコーディングから申しますと、世界的レーベルのNAXOS から「日本のギター音楽」をテーマにシリーズを展開し、一昨年の第1集(武満徹作品集)に続いて、第2集(三善晃、池辺晋一郎、細川俊夫ほかを収録)を1月末に発表しました。ゲストに京都出身のハーモニカの名手、和谷泰扶(わたに やすお)さんを迎え、林光作品を中心にした第3集も、今秋にはリリースされます。パッサン作品集は第5集(リュート組曲第2番/ヴァイオリン・ソナタ第3番ほか)までの収録を終え、次回録音予定の第6集で完結です。秋には室内楽の新たな試みとして、ウィーン・フィルの前コンサート・マスター、ライナー・キュッヒルさんとの共演で、同じくNAXOSでの録音とコンサートが控えています。これはベートーヴェンと同時代にウィーンで活躍したイタリアの作曲家マウロ・ジュリアーニとパガニーニを中心にした古典ものです。あとは2017年からのシーズンで、北米とメキシコへの大きなツアーを準備中です。

演奏家人生の中で、特に印象深いステージや、

心に残るエピソードがあれば、ぜひお聞かせください。

印象深いステージは余りに多すぎて、これ、と具体的に挙げることは難しいですね(笑)。ただ、音楽家になって良かったと思った瞬間として、最近で言えば、2度も還暦祝いのサプライズ・パーティーを開いてもらった事が挙げられましょか。1度目はギタリスト仲間の荘村清志さん、作曲家の野平一郎さん、作家の逢坂剛さん、楽器製作家、デザイナー、レコード・ディレクターら親友たちと。そして、2度目は、鈴木大介君、大萩康司君、松尾俊介君、朴葵姫さんら昔からの生徒たちに囲まれてでした。特に後の方は、これまでに教えた全員が出席してくれていて、その全員が、CDを発表していたことにも、改めて驚きました。もちろん“出世頭”の村治佳織さんからも、温かいメッセージをいただきました。「教えた皆が、幸せになる」。これほどの喜びはありませんね。

今後、ザ・フェニックスホールに期待すること、希望することは？

何よりも、「Osaka Guitar Summer」をずっと続けて下さい。これからも、よろしくお願い致します！

最後に。ギタリストとして、音楽家として、そして、人間として、福田さんの究極の目標とは。

「健康で、好奇心を絶やさず、あらゆる人たちを触発し続けたい」と願っています。

福田進一さん出演情報

「荘村清志&福田進一 デュオ・コンサート」
4月2日(土)午後2時開演。入場料4,800円(指定席)、友の会4,300円。

「Osaka Guitar Summer 2016 <福田進一と仲間たち vol.7>福田進一&ジェレミー・ジュヴ ジョイントリサイタル」
8月27日(土)午後7時開演。入場料4,000円(指定席)、友の会3,600円、学生1,000円(限定数)。※詳細は3ページをご参照ください。

いずれも会場は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール。

劇場という天体 奈良 ゆみ

思い起こすと生まれて初めて人前で独唱したのは確か8歳の時、大阪中之島公会堂で“少年老い易く学なりがたし”と太田道灌の詩吟“孤鞍雨を”についてだった。祖父が詩吟の師匠をしていて、お孫さんの特別出演(ごまめ)として歌わせてもらった。舞台に出ると劇場は大草原、咲き乱れる花々はそよ風に揺れながらみんな私の方に優しい眼差しを投げかけてくれる。私は、鳥になって劇場の空を飛回り微笑む花々の聴衆に話しかけた。それは、今まで知らなかった空間の中で心と心を合わせる歓びのときだった。解放のときだった。

高校生になってマリア・カラスのレコードを聴いたとき、私の全身に青い炎が廻り、これこそ私の全霊!と、隣の高校の音楽の先生に歌を習いに行った。岩本先生は私に、声が遠くに、劇場の隅々にまで伝わるように、様々なテクニックを教えてくださいました。そして、歌は魂とその声が一体となるべきであるということも。

その当時は将来のことなど何も考えないで、ただ音楽に歌に心を洗われることだけが私の日々の目的だった。パリに留学し、そのまま殆どすぐに演奏活動が始まった。パリ、フランスの地方、ヨーロッパ各地の様々なホール、空間で歌ってきた。ロマネスクの教会や、いわゆるテアトル・イタリアンと呼ばれる古いスタイルの劇場。これは客席が数階にわたって馬蹄型になっていて、椅子は紅いピロード張り、天井にはルネッサンスの絵などが描かれ、シャンデリヤが吊るされている。劇場そのものが既に、厳かに歴史を語っていた。

夏の音楽祭では、よく野外の円形劇場でも歌った。アテネの古代円形劇場では、極暑のあまり、日中のゲネプロも不可能な状態でいきなり本番へ。しかも、そのときのプログラムはクセナキスの綿密に構築された曲だったのに、全員かなり溶けたような演奏になってしまった。お客さんだつて、石の階段座席が熱くなりすぎて座れないほどだったから。

印象に残るのは、ハンス＝ピーター・クロースの演出でシェーンベルクの「月に憑かれたピエロ」を歌ったとき。それまでに幾度もこの曲を演奏して来たが、ボルドーオペラ座の主催公演は、演出家の方針でオペラ座ではなく、わざわざ河岸の船着き場の倉庫を改造した場所で公演することになった。ガランとした何も無い箱のような空間。

もう一カ所はヴァンセンヌの森の中に在り、カルトゥッシュリーと呼ばれる昔の弾薬倉庫を改造した劇場。アリアヌ・ムヌシュキンの太陽劇団の本拠地で、前衛的な芝居やコンサートが催されている。

これも劇場と云うよりだだっ広い空間で、クロースの演出は、その箱の空間の真ん中に長さ25m程の白い布をかけたテーブルを置き天上からは裸電球。飲み干したワイングラスの散乱するそのテーブルの上を、私は行ったり来たりしながら歌い語る。楽器の演奏者は、下の離れた処にいる。観客は回りで立っても座っていてもいい。昔のベルリンのキャバレースタイルのように。

好きな芝居小屋は、パリの10区にあるブッフ・デュ・ノールで歴史的記念物になっている劇場。長くピーター・ブルックの活動の本拠になっていた。この劇場は、骨組みはイタリアン形式に近いが、飾り気がないどころか殆ど廃屋に近い印象。ところが舞台の壁の汚れやシミの模様は、自然にそのまま



相愛大学声楽科卒業後、仏政府給費留学生としてパリ国立音楽院に入学、メシアンに注目される。以後パリをはじめ欧州各地で演奏活動を展開、パスカル・デュサパンや松平頼則をはじめ多くの現代作曲家から曲を献呈されている。日本では東京でドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》公演(ジャン・フルネ指揮、都響)にメリザンドで出演、このほかクリエイティブなテーマでリサイタルを行う。録音も数多く、『ドビュッシー 歌曲集』は仏音楽誌『ル・モンド・ドゥ・ラ・ミュージック』で最高推薦盤に挙げられている。

それぞれの芝居の背景となり、演じるもの、観るものの想像力に語りかける。

そうだ、舞台装置なんかなくても劇場=ホールに入った瞬間に、ここで何が生まれるのだろうか?何が起こるのだろうか?期待に満ちた心を観客に開かせてくれる宇宙、私はそれを願う。

劇場=ホールは、不思議な場所。一つの空間に演じる人と、演じる心持ちを感じたい人たちが集まって、或る限られた時を共に過ごす。音楽の場合は、作品が演奏家の心身を通り抜け観客の心に呼びかける。それぞれの人の中に、それぞれの思いが廻る。

私はコンサート前に、たとえ数分でもただ一人になって誰も居ない劇場=ホールに身を置く習慣を持つ。舞台から客席の奥までゆっくり歩き回り、時にはちょっと踊ってみたり声を出してみたりして、空間を全身に実感する。おまじないのようだが、見えない空気の揺らぎに身を任せ同化する。これは、ほとんど動物の仕草かも知れない。

日本では大阪城ホールでの一万人の「第九」から、小さなサロン、また20人も入れれば満員のライブ・カフェでも歌って来た。何千人から8人まで、聴衆の数は様々だった。でも私はいつでも一対一の心持ちで歌うので、その場の観客の人数に演奏が動かされることはほとんどない。

昨年12月、久しぶりにザ・フェニックスホールで、ピアニストのジェイ・ゴットリーブと「オリヴィエ・メシアンと松平頼則による愛の歌」のコンサートを、ホールの協賛で開いていただいた。事前に見学に訪れたところ、以前の支配人はもう居られなかったが、劇場の支配人、スタッフの方たちが迎えてくださって、何と嬉しく懐かしく思ったことか。何年も前の照明のプランまで憶えて下さったことにも感激した。

すでに知っている筈のホールに入った途端、また目を見はった。高い吹き抜けの天井が誘う。モダンなのに劇場自身が自己主張することなく、寡黙に私たちを待っている。どこか古く、心の故郷を呼び起こされる匂いがする。舞台は小さくて、お客様との境もほとんど無く、手が触れて歌っていてそのまま一緒に親しい佳い国に飛び立てそう。

演奏会の当日、スタッフの方達はこやかにユーモアさえ交えて、私たちが上機嫌で演奏できるように支えてくださった。上機嫌はとても大切なこと!晴れやかな心を支えてくださるのは舞台には出ない人たち、その人たちの愛を感じるのが幸せ。ジェイと私は天空でお互いを聴き合い、観客と一緒にこのホールの空間から飛び立ち、遠い処に心を漂わせていた。

私にとって大切なことは、劇場=ホールそのものが劇場=ホールでなくなり、見えないものが見え、聞こえないものが聞こえ、心が果てしなく遠く高い処に連れて行かれ、神秘で神聖な空間になること、全ての喜び、善悪、悲しみまでも光に換える天体となること。これが理想だと思っている。今回のコンサートは8歳のときの中之島公会堂の感覚がまた蘇り、とても幸せな時だった。(なら・ゆみ=ソプラノ歌手)

Gallery



『ピアノの家』

当ホールはコンサートグランドピアノを2台、備えています。ヤマハのCFIII-SとスタインウェイのD-274。いずれも音楽監督(現・名誉音楽監督)の江戸京子が選定しました。

前者は1995年の開館時に購入、20年を経過していますが、バリバリの現役。白鍵は象牙、黒鍵には黒檀が使われピアニストからは「密度が高く吸湿性に優れている」と評判です。スタインウェイは2011年に購入の2代目。年間およそ100回におよぶ出番があります。共に定期的なハンマー交換など、技術者の入念なメンテナンスにより大切に管理しています。

2台はふだん、1階客席後方のピアノ庫に保管されています。湿度や温度が一定に保たれた静かな場所。ひっそり身を寄せ休んでいます。

大ホールではピアノ庫は、「奈落」と呼ばれる舞台下の空間付近に設置されることが多

く、ピアノをセリに載せ、ボタン一つで昇降できます。その点、当ホールは終演後、お客様がふだんお使いのロビーや廊下を特別な台で移動しなければなりません。使用の際は「ピアノの家」から舞台へ同経路で「出勤」させます。

ピアノは幅が約1.6メートル、奥行き2.75メートル。廊下の幅は約2メートル、狭い所は何と1.7メートルしかなく、移動時は壁などにぶつけないよう細心の注意と高度なテクニック(!?)が必要。担当技術者は気を緩めることができません。これら入念な管理のお陰で2台は今も、美しい外観を保ち、音色は年月と共に熟成もしてきます。加えて関西屈指の名調律師が日々、音を整え、公演に提供しています。

ピアノはホールの根幹を成す重要備品。多くの人々の愛情を受け、今日もイキイキ、活躍中です。



「サロン」—— 温故知新

《お静かに!》という絵がある。描かれているのはパリカロンドンのお金持ちの客間「サロン」。ヴァイオリニストは演奏中のような。音楽家を囲むのは、盛装のご婦人にタキシードの紳士。周りを見回し着席するご婦人が「主(あるじ)」かもしれない。1875年頃の作で、題材の室内楽風景もおそらく19世紀半ば前後と思われる。

描いたのはジェームズ・ティソ。1836年仏ナント生まれ。パリで活躍、30半ばにロンドンに渡る。パリをはじめとする欧州の都市で貴族に代わって勃興した市民、とりわけ上流階級のサロンをはじめ、エレガントな社交シーンを数多く描き、注目を集めた。

この「サロン」とはそもそも何か。古代のギリシャやその後のローマに存在した、遊芸と教養に秀でた女性のもとで催された社交の場をはじめ、中世の南仏で発達した騎士と貴族女性との語らいの場、ルネサンス時代のイタリア宮廷での人文主義的な会合などを先駆と位置付ける説がある(※1)。私たちホールがとりわけ深い関心を持つのは、17世紀以降、ヴェルサイユ宮殿で、続いてパリの貴族社会で、さらには19世紀以降、パリの新興市民階級(ブルジョワジー)の邸で、女性が主宰した私的な文化サークルである。

18世紀以降のベルリンで開かれたサロンも、パリに並び称される(※2)。ウィーンやロンドン、バルセロナといった西欧のほかロシア、米国にも見られ、そこでは文学や哲学、政治が論じられ、しばしば音楽も奏でられた。裕福で地位も恵まれた女性が貴族や芸術家や作家、学者らを邸に定期的に招き、才気煥発の「会話」を軸に音楽演奏や演劇、朗読なども楽しんだ場や営み。それを「サロン」と定義づけることができる(※3)。

サロンは、社会的活動を抑圧されていた当時の女性たちにとって、貴重な活躍の場だった(※4)。こうした「サロンニエール(女主人)」の中には、音楽を重視するサロンを主宰する例が少なくなかった。ショパンやリスト、シューマン夫妻やヴァーグナー、ドビュッシーやフォーレ、マーラーといった音楽家がそこでキャリア(少なくともその一端)を築いたことは、知られている。彼女たちの「音楽サロン」はとりわけ1830年代、パリの「七月王政期」以降、新しい音楽や音楽家の育成・発信によって、創造や享受を支える「揺籠」として機能したのだった。

ただ、こうした19世紀のサロンは、「市民社会」の人々や組織が営む公共空間としての性格

も帯びながらも、上流社会ならではの、或る閉鎖性をはらんでもいた。近代の社会の民主化の進展や資本主義の発展(芸術文化についていえば、お金を払えばだれもが入れるコンサートホールのような発表・実践の場の登場など)によっ



ティソの描いた《お静かに!》(英名:Hush!)。副題にコンサート(The Concert)とある。112.2センチx73.6センチ。キャンバス。油彩。

多彩な「会話」で新境地期す

て、それは徐々に衰え、20世紀半ばには、ほとんど絶えた。

ザ・フェニックスホールが、こうした歴史を持つ「サロン」を念頭につくられていることを、私たちはこれまで述べてきた。この絵に見られる「親密感」を、私たちホールは構造として(しかもモダンな姿で)備え、絵の中で奏でられているような「室内楽」を、事業の柱に据えてもいる。

一方で私たち施設は、「現代のコンサートホール」としての性格を当然併せ持っている。「閉鎖性」を帯びた往時のサロンとは異なり、社会のすべての人に開かれた、現代的な、公の施設としての性格が、ホールの個性を形づくっている。そうした中、「室内楽」をはじめとする、このホールにふさわしい音楽を、現代の聴衆にいかに提供していくか。そのことは、サロンであり同時にホールである施設の課題であり続ける。逆に新しい音楽を支援した「サロン」を引き継ぐ施設として

は、すぐれて現代的な内容の舞台を手掛ける意味合いもあると考えることが出来る。

2015年度、私たちは開設20年の節目を迎えることができた。この春から、さらに新しい歴史を刻むにあたり考えるのは、「親密な空間」「新たな芸術文化の支援」といった、いわばサロンの古典的な機能と共に、現代にふさわしい「地域社会への貢献」や「次世代の育成」といった役割を

さらに担い続けることの大切さである。これまでの本誌インタビューでも述べられたように、社会からはそうした要請が寄せられている。

いにしへのサロンが人々の自由な「会話」を軸に成り立っていたことを考えると、私たちも多くの人々とコミュニケーションを一層重ね、あらたな時代を切り拓いていくことが求められているのは、間違いないだろう。皆様の、ご支援ご協力を心から願う次第である。

※1 例えば『ヨーロッパのサロン』ヴェレーナ・フォン・デア・ハイデン＝リンシュ著 石丸昭二訳 法政大学出版会 1998年

※2 『ベルリンサロン』ペトラ・ヴィルヘルミー＝ドリンガー著 糟谷理恵子ほか訳 鳥影社・ロゴス企画部 2003年など

※3 この項の記述も前掲『ヨーロッパのサロン』に多くを負っている

※4 『音楽サロン—秘められた女性文化史』ヴェロニカ・ペーチ著 早崎えりなほか訳 音楽之友社 2005年に詳しい

とらわれの幸せ

一日紫喜 恵美



Keizo Matsui

初めて映画『サウンド・オブ・ミュージック』を見たのは中学2年生でした。テレビで放映されたその画面と音楽にとりこになり、当時、テレビは1時間までと親に決められていましたが、怒られながらとうとう最後まで見ることができました。興奮そのまま、翌日には合唱部の仲間たちと『サウンド・オブ・ミュージック』ミニ版を自分達でやることに。大学に入学すると、なんと、オーケストラも美術の人達もいる！「ミュージカルできないでしょうか？」現、大阪音楽大学短期大学の副学長本山秀毅先輩に相談、たくさんの方が協力して下さり、指揮は佐渡裕先輩というなんと豪華な『サウンド・オブ・ミュージック』でマリア役を経験することができました。こうして舞台のとりこになったまま、たくさんの役を演じ、歌う機会に恵まれてきました。

オペラデビューの『魔笛』の夜の女王を演じた際、役の中の怒りや呪わずにいられない気持ちが切なくて楽屋では涙がとまりませんでした。演出家、宮本亜門さんが舞台化されたミュージカル『キャンディード』では数々の苦難の末にすっかりスレたヒロインの私と一緒に畑を耕そうとプロポーズに大合唱、何度心から改心の涙を流したことでしょう。『ランメルモールのルチア』、『夢遊病の女』、『椿姫』などのヒロインを演じた時は、なんだかネグリジェばかり着ている？と言われましたが、泣かない!!!と強く念じているにも拘らず、つつつと勝手に頬が濡れ恥じ入りました。もちろん笑ってばかりの役も。恋する乙女たち、愛すべき女中役たち。子役を演じた中でも、ザ・フェニックスホールの舞台背面を開けていただいて、夜景をバックに空を駆ける歌を歌ったことは忘れられません。

そして、『ナクス島のアリアドネ』のツェルビネッタ。生命力豊かな役ですが、初めて演じた時、アリアを歌っている途中で舞台も自分もない、ひたすら音楽だけがある…という状態を経験しました。それがあまりにすごい経験でし

たので、なんとかもう一度演じたいと思っていたところ、有名なメゾソプラノのSさんが〇〇断ちをしていると話されました。「それ、何ですか?」「好きなものをやめて願をかけるのよ」「何をかけて?」「人には言わない。好きなものは?」「えーっと、ケーキとシュークリームとパンケーキ…」「全部やめなきゃダメね!」かくして7年、なんともう一度演じる機会が訪れました。7年ぶりのシュークリームはととても油っぽく?…Sさんに報告すると「はあ?私そんなこと言った?」。(笑)

このツェルビネッタのアリアは捨てられた王女を励ますものですが、それに反してか、だからこそか、恋せずにいられない女心が溢れ出ます。あつかましいほどに人間らしくエネルギーに満ちたこの曲を歌うと、自然と元気になることができます。長大なこのアリアは、語りから起伏に飛んだ高音まで自身の歌唱テクニックのその日その日のバロメーターにもなり、旅行中であろうと病気であろうと、ほぼ毎日歌っています。もうウン十年ですから、もしかするとギネスものかも?しれません。

今年久しぶりに『リゴレット』のジルダを演じます。ドイツやオーストリアでイタリア人やロシア人、さまざまな国の方と演じましたが、今回は東京から成田博之さん、山口から藤田卓也さんが駆けつけて下さり、鳴門に集結します!

また、今は自分が演じるだけでなく、母校で生徒たちと作品を創りあげる機会にも恵まれています。何より自分の役だけでなく、たくさんの方々がそれぞれ演じることにより、何倍にも広がる役たちに一緒に取り組む経験は得難いものです。

小さな1人の私を何倍にも豊かに生きる経験をさせてくれた役たち、これからも舞台に歌にとらわれ続けていければ心から幸せです。

日紫喜 恵美(ひしき・えみ)/ソプラノ

京都市立芸術大学大学院修了。オーストリア政府給費留学生としてザルツブルク・モーツァルテウムに留学。さらにミュンヘン国立音楽大学でも学ぶ。日本モーツァルト音楽コンクール第1位。日本音楽コンクール第2位。ベルギー国際音楽コンクール第2位など受賞多数。日生劇場『魔笛』夜の女王でデビュー。小澤征爾指揮、ローラン・ベリ演出の『ジャン・スキッキ』や佐渡裕指揮、宮本亜門演出の『キャンディード』などで数々の主演を重ね、ミラノ、ヴェルディホールにおけるヴェルディガラコンサートに招聘を受けるなど海外でも活躍。華麗なテクニックと豊かな情感を持つソプラノとして注目される。京都市立芸術大学准教授。愛知県立芸術大学講師。



あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー5F TEL 06-6363-0211

Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月 2016年3月
発行 あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール
編集 吉元 晃
デザイン 松井桂三有限会社

